

現 地 通 信

チェンマイ大学

「ランナータイの歴史・ 考古学セミナー」に出席して

桂 満 希 郎

I

今回のセミナーはチェンマイ大学人文学部の単独主催によるもので、同学部学部長のモーム・ルワン・トゥイ・チュムサーイ博士より京都大学東南アジア研究センター・バンコク連絡事務所あて代表を送るようにとの招待があったものである。あいにく歴史あるいは考古学専門の方が在タイしておられなかったため、比較的近い分野にある私が出席してはとの連絡を同事務所より受けて、結局チェンマイに出かけることになったのである。先にタイ国芸術局により開かれた2回にわたる歴史考古学関係のセミナー（第1回 1960年スコタイ；第2回 1967年チャイナート）¹⁾にくらべて、今回のそれは主催者が一大学の一学部という小さいものであったためか、かなり小じんまりした家族的な雰囲気のものであった。出席者も大して多くはなく、発表者および主催者側のスタッフを含めても約

200名くらいではないかと思う。また、芸術局による前2回のセミナーに比べると、いわゆる歴史・考古学の「大物」あるいは「長老」の顔ぶれがそろっていなかったという印象を受けるが、その反面、若い研究者および歴史・考古学を専門としないが関心を持っている人、あるいは北タイの郷土史家とでも言うべき人達がよくそろっていた点は面白い。出席者が少ないという点については、バンコクとチェンマイ間の旅費が自己負担になっている点も考えねばならないであろう。

題名の「ランナータイ」と言うのは、マンラーイ王がランプーンのハリプンチャイを征服しチェンマイに都を建てた仏暦19世紀より同25世紀に至るまでの約500年にわたる北タイ王朝を意味し、この意味でチェンマイ大学が本セミナーの主催者となったのはしごくもったもな事と言えよう。マンラーイ王以前にも北タイ一帯にタイ族が存在していたことはたしかであるが、少なくとも今回のセミナーに関するかぎり、「ランナータイ」と言うのは上記の約500年を指すものと見てよい。また地理的に言っても、同王朝の全盛期には現在の北タイだけでなくラオス、ビルマ等をはじめとする近隣諸国の一部をもその領土内に含んでいたのであるが、この点に関しても、セミナーの中心は現在の北タイ（チェンマイ、チェンラーイ、ランプーン、ランパーン、プレー、ナーン、メーホンソーンの7県）を指すものと解される。この地域は、チェンマイ、ランプーン、チェンセーン等をはじめとして、未だ未研究の遺跡が残っており、タイ国あるいはタイ族の歴史を研究するうえではなほだ興味深いところであり、今回のセミナーが開かれたことは喜ぶべき事と言わねばならないであろう。私の行動は、10月19日チェンマイ

1) 石井米雄「タイ国芸術局主催歴史考古学セミナーに参加して」『東南アジア研究』第5巻第1号、pp. 201~206, 1967.

着、23日までチェンマイ大学に滞在、セミナーに出席、24日一日チェンマイを歩きまわった後、25日バンコクに帰着した。以下、プログラムを追ってセミナーの模様を略述していく。なお、ここで言う「考古学」(borannakhadii)の意味は石井教授の説明されたものの²⁾と同じである。

II

10月19日：10月ともなれば北タイはかなり気温が低く、空気も乾燥していて快適である。駅に着くと、2～3人の先生が大学からむかえに来てくれており、さっそくバスで大学に向かう。大学は町を出はずれた、ドーイ・ステープのふもとにあり、おどろくほど広いキャンパスに建物が点々とちらばっている。タイ国の大学で最も快適な地を占めていると言えよう。宿舎にあてられた第1男子寮に落ちつき、すぐ登録を行なう。バンコク・チェンマイ間の旅費、宿泊料1日10バーツ、屋外見学費30バーツ、登録費10バーツが自己負担になっており、その他の費用は大学の負担である。宿舎は3人用の大きな部屋を1人1室あたえられ、ぜいたくなほどスペースがある。窓からはキャンパスを一目で見渡すことができ、チェンマイ名物のドーイ・ステープも見え

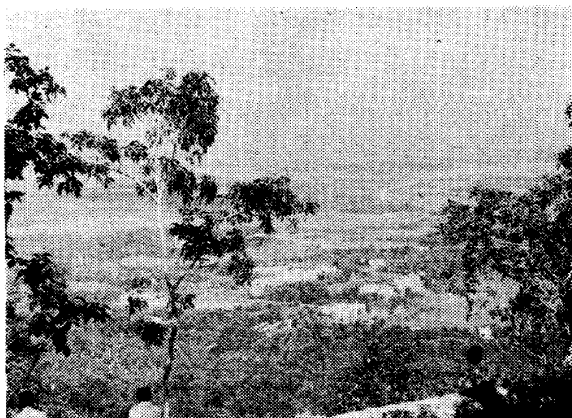


写真1 ドーイ・ステープよりチェンマイ大学を見おろす

2) Ibid.

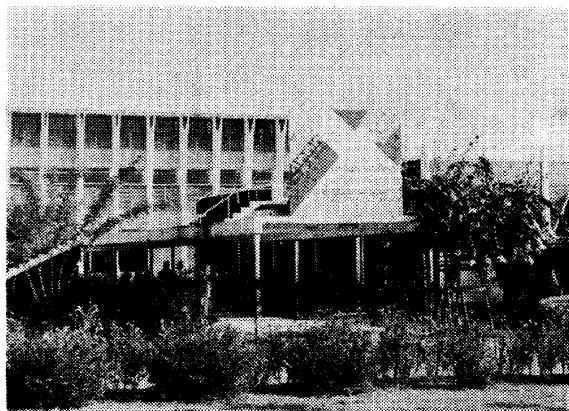


写真2 チェンマイ大学人文学部 セミナーの会場

る。夕方6時より学部長によるレセプションが人文学部の庭で開かれる。これを通じて色々な人に紹介されたが、予想以上に若い人達(特に女性)が多い。特にチェンマイ大学のスタッフは、まだ大学そのものが若いせいか、私と同年にチュラーロンコーン大学で勉強していた人達が多数見かけられたのはうれしかった。

10月20日：会場に当てられた人文学部講堂で総長の開会の挨拶があった後、9時よりさっそく本題に入る。Khachon Sukkaphanit氏の「ランナータイとスコタイおよびアユタヤとの歴史的関係」でスタートを切る。発表の要点は、(1)スコタイは当初にハリプンチャイから文字を習い、その後タマラーチャーリタイ王の頃にランナータイに対し逆輸入し広まったのではないかと。これをささえるものとして、母音記号aの代わりに同じ子音文字を二つ並べる方法はスコタイとハリプンチャイ以外には見出されないことをあげ、さらにマンラーイ王がハリプンチャイを征服した際 Phayaa Yiibaa はスコタイ方面にのがれ、その後間もなくスコタイ文字が現われたことを指摘している。また声調符号の見られるのはビルマのミャ・ゼーディー碑文のピュー語とスコタイ碑文のみであるが、この声調符号に関する問題は今後の

研究のためサジェストするにとどまる。(2)セイロン派の仏教は南方よりスコータイを通じてラーンナータイに入っただけでなく、タトン、パガン、ランプーン、ラーンナータイというルートもあったにちがいない。だいたい、要点はこういったところであるが、これに対して問題の中心にふれるような質問あるいは反対意見は全然出なかった。次いで、休けいの後、グリスウォルド氏の「ラーンナータイの仏像」にうつる。最初に仏像一般に関するイコノグラフィの説明をし、次いでその理論にもとづいてスライドによる実例を見せながら、ラーンナータイの仏像の歴史的変遷を説明したものである。氏の考えはタイ国で一般に受け入れられている考えとは多少ことなっているので興味深かった。先に大学を訪問しておられた皇太后殿下の出発を見送るのに時間をさいたため質疑の時間がけずられたのは残念であった。午後は一同ワット・プラシンに出かけその広間で M. C. Saphatradit Ditsakun 教授の「ラーンナータイの建築」であるが、同教授が公務の都合上出席できなかったので、芸術局のソムチット氏が代理発表した。本ペーパーにおける建築と言うのは主としてチェディー(仏塔)を意味していると考えられるが、これに対して、チェディーのみを対象にすればどうしても材料不足となるので、もっと広い意味に解して都跡や城壁跡等も重要な資料として考慮に入れるべきではないかとの意見があった。また Khachon 氏より14世紀以前の遺跡があるかどうか、そしてウィエン・チャイプラカーンの位置については *Tamnaen Singhanawat* (ตำนานสิงหนวัต) の「チェンセーンより一晩歩いたところ」と言う個所からして、現在のフェーン近辺にあったという考えには、時間的・地理的にみて賛成しがたいという意味の発言があったが、この2点については今後の調査・研究に待たねばならないというところに落ち着く。この

後、ワット・チェディー・チュート・ヨード、ワット・ウモーンを見学し、第1日目終了となる。一般に、問題の核心にふれる発言がとばしいように思われた。

10月21日：前日と同じ要領で、(1)ティン・ラティカノック教授の「ラーンナータイ時代の教育」、(2)プラサート・ナ・ナコーン博士の「マンラーイ王の法律」、(3)シンカ・ワンナサイ氏の「ラーンナータイの詩」が順を追って進められる。(1)は当時の教育が寺で行なわれたために、主として男子の教育に話がしぼられる。教育課程、内容、先生となる僧侶の位による教授義務の分担から、一定の課程を終了した者に与えられる称号および彼らのたずさわる職業あるいは共同体で果たす役割等についての説明である。同教授の研究はチェンマイ文字による古文書および村の老人とのインタビューにもとづいて成されたものと考えられる。(2)は非常に興味深いものであるが、同博士も最初にことわったように、公務多忙のため準備時間を欠いたためか、原本の種類・経歴の説明があった後、法律の条文(現



写真3 ワット・プラボロムマタート・ランプーン

代タイ語に訳したもの)を読みあげるにとどまる。これは当時の社会その他を知る上で非常に面白いものと思われるが、後日この条文が印刷配布されるのが楽しみである。ただ、現代タイ語になおしてしまわずに原文のままあるいは両方を掲げて欲しいものである。(3)は北タイの地方文学で韻文を取りあげ、主としてカーオを説明したものであるが、実例を朗詠しながらの説明で、全員楽しく聞いた。しかし、地方文学という性格上、各地に散在する作品を収集・整理・分類(時代的および内容的に)するまでには至っていない。これは作品自体が広い地域にちらばっていること、作者が名前を書き残すことがほとんどないことを考えると、極めて困難な仕事と言わねばならないであろう。また、韻文の形式による分類のほかに、歌い方にも色々な形があり、同一の詩でも色々な調子で歌うことが出来るのであるが、実際に聞いてみると、意味は別として、その調子が日本の琵琶、狂言等の調子におどろくほど似ている。この最後の議題はワット・プラタート・ドーイステープにて行なわれた。

10月22日：朝からチェンマイを出て、並木道を通りぬけてランプーンに向かう。ランプーンの町は、自動車や人やサームローなどで混雑したチェンマイとはことなり、昼間でも不思議なほどひっそりとしている。まず、ワット・プラボロムマタート・ランプーンに着き、その集会室で Saeng Monwithuun 氏の「ラーンナータイにおける仏教の歴史」が始められる。発表の内容はラーンナータイにおける仏教史概説とでも言うべきものであったが、同じセイロン派の仏教でありながら中部タイと北部タイとではなぜ経文の読み方の調子がひどく異なるのかと言う質問があり、これに対して、同じ経文でも受け入れられた地方の言語が異なるとそれにつれて読み方の調子も異なってくると考えられるとの答えが

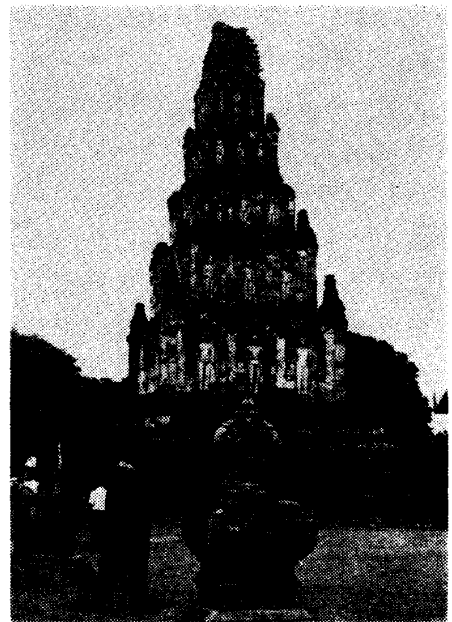


写真4 ワット・チャーマテーウィーのチェディー

あった。また大変興味深い質問として、ラーンナータイの人達をして仏教と深い結びつきを保たせているものは何であろうかというのがあったが、これに対して、Khachon 氏が子供の家庭における教育あるいはしつけが深く仏教に根ざしたものだからではなかろうかとの意見を出したが、あまり説得力はなかったようである。次いで Manit Wanliphoorn 氏の「ハリブンチャイおよびウィエン・ターカーンにおける考古学上の遺跡」にうつり、話の要点はハリブンチャイの位置、建立者および統治者、ハリブンチャイの民族あるいは人種、ウィエン・ターカーンなどについて、最近調査された遺跡および自分の調査の結果にもとづいての発表であるが、代理発表であったため、主としてハリブンチャイの民族、人種、ウィエン・ターカーンに話が限られる。ハリブンチャイの先住者はいちおうコームについてモーンということになっているが、決定的な結論はまだ出ていない。ウィエン・ターカーンの周辺には三つ四つのモーンの部落があり、古い城壁内にはタイ化した、または

ほとんどタイ化しているタイヤイの村があり、現在のランプーンにもモーンの村が多数存在するが、これらの村に当たってみると、比較的新しい時代に移って来たものと、古くから住みついでいてタイ化したものとの二つに分かれる。そこで、ピン川流域の住民が何民族であったかという研究を、ボンサーワダーン、タムナンの面からだけではなく、実地調査の面からも進めるべきではないかとの発言がティン教授によってなされた。ウィエン・ターカーンと言うのは、1965年芸術大学のチームにより調査された都跡で、490m×740mの広さを持ち、12世紀のころのハリブンチャイ遺跡としてランプーンに次ぐ重要な所とされているが、細部に関しては、今後の調査研究に待たねばならない。

10月23日：最後の発表は、歴史とは直接の関係はないが、Sanguan Chootisnkkharat 氏の「ラーンナータイの歴史研究における諸問題」で、調査研究のための費用、文献の収集と研究、遺跡類の保存・盗難防止等に関する話である。調査研究の費用という点について、自分の国のことでありながら何かや



写真5 ウィエン・ターカーンのチェディー



写真6 ワット・ブラユーン

る度に外国の財団から金をもらわなければならないのは情ないことで、それくらい自分の力で出来ないものだろうかと言う発言があったが、これに対して、外国の財団が援助してくれるのは、歴史的遺跡というのはタイだけのものではなく全人類のものであるという考え方にもとづいたものであり、またタイだけでやっても大したことは出来ないから、いまのところ援助を受けるのも仕方がないという意見が出た。文献については、古いチェンマイ文字で書かれた貴重な資料が各地にちらばっているが、これらを一所に集めて整理分類し保存するためには、どうしてもチェンマイ文字の知識が必要となるが、この役目はチェンマイ大学が引き受けるべきだとの意見が出る。これに対し、同大学ではマスターコースの歴史の一科目としてチェンマイ文字の授業を行ない、ひいては北タイの文献を収集整理し図書室を作る計画がある旨、ティン教授より回答があった。その他、歴史的遺跡の盗難・破壊等に関して、これは現在の初等教育における歴史科目を改める必要がある。今のそれは、歴史と言えは年代と人名の暗記にとどまり何

のおもしろ味もないものとなっているが、これをもっと自分達の歴史に対して興味をいだかせるような性格のものに改める必要があるとの発言があった。また新しい都市建設のために遺跡が犠牲にされることに対する強い反対の態度が示された。こういったセミナー等の機会には都市建設に関する役人をも呼ぶべきだと言う意見も出た。最後の日には Sanguan 氏の発表のみで午前中全部を費やし、その後すぐ、学部長による閉会の辞があり、希望者のみパー・ダムへピクニックに出かけて終了となる。

III

今回のセミナーに出席して感じられたことを記して最後の章としたい。いつもよく言われることではあるが、発表者に対する若い人達の意見発表が少ない。これは彼らが自分自身の考えあるいは発表された内容に対する疑問や反対意見を持っていないと言うことではなく、そうすることが礼に反するとでもいう風潮があると言った方がいいだろう。休けい時間には盛んに色々な意見が取りかわされ、「タイの学会では自分より上の人に対して反対意見をのべる者がいないのは困ったものだ。」という意味の言葉はよく聞くのであるが、いざという時になると、そう言っている人達自身もたいていは沈黙を守ってしまうのである。また、全体を通じて、発表内容の核心に触れるような質問・意見等が案外少なく、どちらかと言えば第二次的な末梢事についての発言が多く、中にはかなりな「トンチンカン」もあった。例えば、ティン教授の発表において、ラーナータイの教育そのものについての発言よりも、「laannaathaj」は元は「láannaathaj」であったかどうかということにかなりの時間を費やした。最後のセッションで、反省として、「もっと中心問題を論ずるべき

で、直接関係ない小さな事柄は大して重要ではない。」という意味の発言があったが、これに対して「小さな事でも重要だ」という反対意見が案外多かった。この点については、出席者のほうに発表者と同程度の予備知識が欠けていることに原因があるかもしれない。ペーパーは開会前日に配布されたが、もう少し早くから配布して、各出席者が内容について質問なり意見なりを持つに充分なだけの余裕を与えれば、かなり防ぐことが出来るのではなかろうか。

先にものべたように、今回はタイ国における歴史あるいは考古学の「大物」とでもいうべき人達が比較的少なく、そのかわり他の分野を職業とするかたわら個人的にこつこつと研究を進めている、いわば「郷土史家」とでもいう人達が多かった。これらの人達はいわゆる「大物」のように華やかさはないけれども、その分野においてはいわゆる「生き字引」のような人達が多く、こういった人達と話をする機会を持てたことは非常な幸いであった。また、直接セミナー自体とは関係ないが、これを機会に、色々な人と知り合い、話をする事が出来たのは大変貴重なことと言わねばならない。宿舎は1人1部屋与えられたのであるが、毎晩数人が寄り集っておそくまで話し込んだために、最後の日には昼間からいねむりが出る始末であった。歴史のみに限らずどの研究にしろ、その国の人達とつき合い話をするということは、本を読んだり調査に出かけたりするにとらず大事なことだと思う。

最後に、今回のセミナー出席に関して、チェンマイ大学人文学部、京都大学東南アジア研究センター・バンコク連絡事務所に対し、深く感謝する。

1967年11月6日

バンコクにて